

### チャノキイロアザミウマに対する主要薬剤の防除効果の変動

橋元祥一・\*宮路克彦(鹿児島県果樹試験場・\*鹿児島県果樹支援場北薩支場)

Syoichi HASHIMOTO and Katsuhiko MIYAJI: Annual Change of Control Effect by Chemicals on the Yellow Tea Thrips, *Scirtothrips dorsalis*

鹿児島県では、1977年からチャノキイロアザミウマによるカンキツの被害が問題にされ、以来、14年が経過した。この間、黒点病との同時防除も含めて、本虫に対して3~4回の薬剤散布が行われてきた。著者らは、1984年から本虫に対する主要薬剤の防除効果の変動について検討したので、その概要を報告する。

報告に先立ち、試験圃場の提供など多くの便宜を図って頂いた池島信一氏に厚くお礼申し上げる。

#### 1. 試験方法

試験は、出水郡高尾野町で、川野ナツグイグイ(試験開始時9年生)を1処理18本ずつ用いて実施した。供試薬剤は、マンネブ水和剤(75%;500倍)とアセフェート水和剤(50%;1,500倍・1,000倍)、ジメトエート・フェンバレレート乳剤(30+10%;1,000倍)で、毎年、6月5日と25日、7月15日を目安に3回散布した。果実の被害は、橋元ら(1984)に従って、8月15日頃に1区5樹、1樹当たり30果について、原則として毎年同一樹を調査し、被害度と補正防除効果を下式によって求めた。

$$\text{被害度} = \frac{\text{少} \times 1 + \text{中} \times 3 + \text{多} \times 6}{\text{調査果実数} \times 6} \times 100$$

$$\text{補正防除効果} = \frac{\text{無防除区被害度} - \text{防除区被害度}}{\text{無防除区被害度}} \times 100$$

#### 2. 結果及び考察

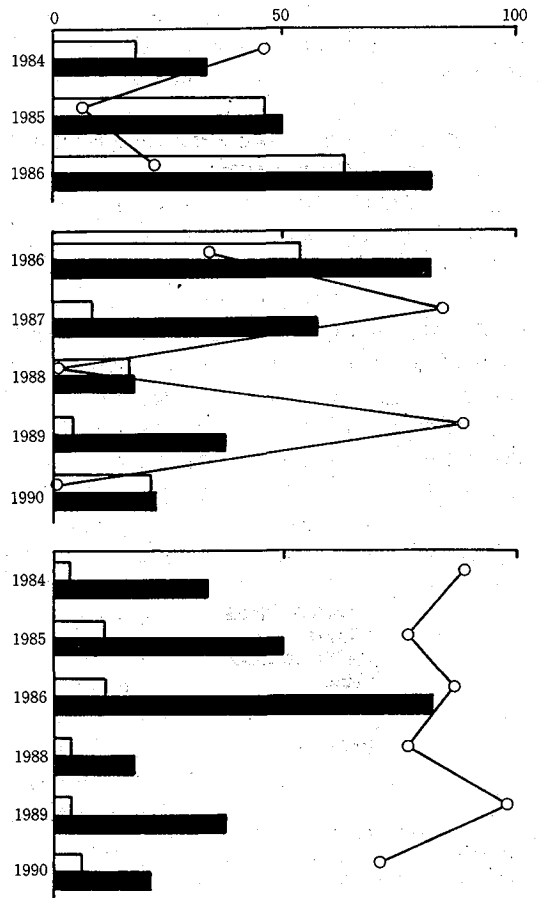
マンネブは、試験を開始した1984年にはすでに効力低下の傾向がみられ、'85年には更に顕著になった。栽培農家の間でも同様のことが指摘され、出水地区ではチャノキイロアザミウマと黒点病の同時防除体系を基本的に見直す必要が生じた。一方、アセフェートは、1986年に1,500倍での効力低下が認められたので、'87年からは1,000倍について検討した。その結果、本虫に対する防除効果が年によって大きく変動する可能性の高いことが明らかになった。これに対してジメトエート・フェンバレレートは、ほぼ安定した防除効果を示し、果実の被害度をおおむね10以下に抑えた(第1図)。

アセフェート散布後の果実上の成・幼虫数を、1987~'89年に調査した結果、'88年は散布後20日目の虫数がかなり多く、残効性が低下していると推測された。しかし、これでは本剤の防除効果が年によって変動することは説明できない。一般的に薬剤の防除効果は害虫の発生が多い時に低下しやすいが、本剤の場合は、無散布区の被害度が相対的に低かった1988年と'90年に防除効果が低下していることが特徴的である。今回の結果ではチャノキイロアザミウマに対するアセフェートの防除効果が変動す

る要因は明らかにされていないので、今後、追究する必要がある。

#### 引用文献

- 1) 橋元祥一・水島真一・河野通昭: 九病虫研会報 30, 164-166, 1984.



第1図 チャノキイロアザミウマに対する防除効果の変動  
横軸は被害度(棒;黒塗りは無防除)と補正防除効果(折れ線)を示した。上段;マンネブ、中段;アセフェート、下段;ジメトエート・フェンバレレート